ICT 海外ボランティア会会報
No. 88

2019 年 10 月 1 日（火）

URL: https://ictov.jimdo.com （2017 年以降）
http://www.ictov.jp （2016 年以前）
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
心の糧を下さった恩師「ウルトラ C」
当会特別顧問　石井　孝氏

◆海外実践マネジメント
今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(12)
元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現(株)ハイホーCEO　鈴木　武人氏

◆海外グラフィティ
「銀河鉄道の父」を読んで
一時（いっとき）「苦役列車」の時代
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智氏

◆海外便り
ノルウェー俳柳紀行(2)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之氏

◆第 41 回海外情報談話会模様　事務局

特別寄稿

心の糧を下さった恩師「ウルトラ C」

当会特別顧問　石井　孝

2020 年の東京オリンピックが近付いた所為か、最近オリンピックに関する話題が多い。

表題の「ウルトラ C」と言えば、嘗て一世を風靡した NHK スポーツ中継の名アナウンサー鈴木文弥さんが、1964 年東京オリンピックの際、日本選手が至難の技を次々に決めた際に表現した言葉として当時の流行語となったものである。

戦後（第二次世界大戦）の教育改革で、昭和二十二年四月から新制中学が発足した。発足当初の新制中学校は、予算や資材の不足から、校舎、設備、教材、教具のすべてにわたり貧弱を極めた。中でも、英語などを教える教員組織については大変不満足な状態であった。

こうした状況からか、当時、現役大学生が学生アルバイトを兼ねて英語を教えるケースが多かったようである。

我が柏崎中学校にも早稲田大学文学部在学中の鈴木文弥先生が着任された。先生は東京生まれであるが、戦時中に疎開して、多感な青春の一時期を岩槻で過ごされた。

現在柏崎は、さいたま市岩槻区柏崎であるが、当時は岩槻町に隣接する柏崎村であった。

出来たての柏崎中学は小学校の間借りで、ホームルームも物置を改造したコンクリート床の土足教室で、室内は何時も微細なほこりが舞い飛んで居る状態であった。

鈴木先生は、こんな教室は健康に良くないと言われ、天気の良い日には校庭や、時には野外に繰り出して授業をされた。

あの歯切れが良い、都会の香りが漂う如何にもハイカラで、端正な語り口の授業、興に乗ると、英文学やプロ野球の話等、田舎育ちの我々には今までに想像も出来なかった世界を垣間見せてくれた。

野外授業の行き帰りに大声を張り上げて、先生のリードで歌った、NHK のラジオ歌謡「思い出は雲に似て」も忘れられない。

「はるかに遠き日を　呼び返すごと　群れとぶよ　群れとぶよ　夢の数かず」。

先生は卒業されると直ぐに NHK に入局されたので、在職された期間は大変短かったが、思春期を迎えつつあった田舎育ちの餓鬼どもに与えたインパクトはとても強烈であった。

知らず知らずの中に生徒を刺激し、明日への、胸が躍るような夢や憧れを抱かせる、そんな教師が本当の良い先生ではないかとつくづく思う。

東京オリンピック開会式ラジオ中継の「開会式の最大の演出家、それは人間でもなく、音楽でもなく、それは太陽です」に始まる伝説の名調子や、「ウルトラ C」「金メダルポイント」などの名言を残した鈴木先生、先生は NHK のレジェンドになられた。

東京オリンピック開会式ラジオ中継の一コマが、次のユーチューブに残されているが、最終聖火ランナーの実況放送は、まさに圧巻である。

https://www.youtube.com/watch?v=r9rf1ZeikbE

所が、鈴木先生はNHKを定年退職した翌年、58歳で脳内出血で危篤状態になり、左半身不随、言葉も十分に喋れることができなくなってしまった。
入院して言葉もしゃべれなくなってしまったが、よしもう一度喋ろうと決心する。「闘病生活のなかで自分の気持ちにピリオドを打ってはいけない」。そこで止まってしまったらそこでおしまいだ、自分の人生は自分で作っていかなくてはいけない。
朝起きて、あいうえお順を何回も繰り返す発声練習を毎日繰り返す。そして、見事、民放のアナウンサーに返り咲かれた。

また、あいうえお順を何回も繰り返す過程で、「あいうえお」の中に人生の教訓を見出す。
「あ」は相手の立場を考えよう。
「い」は厭なことを進んでやろう。
「う」は上を向いたらきりがない。
「え」は笑顔は自分で作れ。
「お」は御礼の気持ちを忘れるな。

「あいうえお」を忘れて居る日本人の数が増えて居るのが、日本が元気がない原因だ、と言われる。

今想うと、鈴木先生は単なるハイカラなアルバイト先生では無く、教育者としても「ウルトラC」の素地を持たれた方ではなかったかと思う。
一見荒廃した初期の新制中学現場であったが故に、却って、鈴木先生のような素敵な師に巡り会えたのではないかと思うと、昨今、人づくりとか教育の問題が盛んに議論されて居るが、本当の教育環境創りとは如何したら良いのだろうかと、つくづく考えさせられるのである。

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/

今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(12)

―『NTT を巡るグローバル環境の変化』日米貿易摩擦、AT&T 分割・再編、そして NTT のグローバル化へ―

元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現　株式会社ハイホーCEO
鈴木　武人

6.2　エストラーダ大統領の失脚

ラモス大統領が 6 年の任期を終え、予想と異なり、副大統領のエストラーダ大統領が選出されました。フィリピンでは大統領と副大統領は別個に選挙で選ばれ、政党より個人が優先されるため、大統領と副大統領は対立する関係です。フィリピンでは政党の存在感は無く、どの政党に所属するかはあまり意味が無いのです。エストラーダは俳優出身で、民衆の味方をスローガンとしていました。宮津社長が大統領就任に伴う表敬の際に、誰が入れ知恵したのかエストラーダは貧しい庶民出身で、英語が話せないとの前提で、日本語-英語、英語-タガログ語の二人の通訳が同行されて来た事がありました。実際には、中退していますが名門のアテネオ大学に行っていた程の家柄の出です。しかしながら、強引な所もあり、ラモス大統領がせっかくミンダナオのイスラム勢力 MILF と結んだ和解協定が、これは不公正であったとして 2000 年に破棄、軍事攻撃を開始しました。此れに対しイスラム勢力はジハードを掲げて徹底抗戦の様相となりました。このあたり米国のトランプと似た印象が持たれます。個人的にお話しをする機会に得た彼の主義、主張は、『国の金、特に税金を私用に使う様な事は絶対にしない、ただ自分が個人的にコンサルして、その礼として贈られるものはこまばない』と言う事でした。大統領になって忙しくなり、愛人達の数家族を大統領府から便利の良い地区にある、華僑から提供された邸宅(複数)に集めて住まわせた等その典型でした。新聞記者の問いに対して、『これで、もっと国家に捧げる時間が出来、また家族も幸せになった』と答えていたのは、さすがに驚きでした。その他、行政府の高官も含め種々の贈収賄が暴かれて、2001 年 1 月、我々が PTC (Pacific Telecommunications Council)に出席している間に収賄の疑いで弾劾され、失脚退陣してしまいました。この出来事は第二のエドサ革命と呼ばれ、副大統領のアロヨが大統領を継承しました。この出来事の中で、フィリピン通貨が一挙に 31%も落ち、丁度 Honolulu にいた PLDT のメンバーが出張旅費が足りないので何とかしてくれと迫られ、その危機を実感させられました。債務の多くを$US で持ち、収入をペソに頼る PLDT グループも危機に陥るとみられ株価も勿論下がりました。実際、第一回のエドサ革命の際には共産主義化を恐れたり、逮捕を恐れたりして、多くの資産家が資産を安値で売却してマルコス一家を追う形で渡米したそうで、我々もそのような事態に備える必要が有ったのかもしれません。しかしながら、クリントンの同級生を名乗ったアロヨ副大統領が存外しぶとく大統領を務めてくれたので、助かりました。エドサ革命で投売りされた不動産等を安値で買い取って大金持ちになったという人とも何人かお会いして居ますが、この様なリスク対応を為替変動保険で対応する時、どれだけヘッジにかけるかの判断は難しいものです。

アロヨ大統領になって、公務員給与が大統領で$1200/月、大国への大使で$1000/月だったそうで、アロヨ大統領が『役人の給与が安過ぎるから賄賂を取ったりする、その改善が必要』と 10%程の賃上げを提案したそうです。彼女の夫の素行と収賄が酷かった事と、公務員給与の御手盛り提案をした頃から急に人気が衰え、その後、彼女も投獄され、フィリピンの大統領も大変です。ただ、アロヨ氏はドュテルテ政権では下院議長となっています。

6.3　エンロンショック⇒国際会計基準の導入

米電力会社のエンロン社は全く突如破綻しました。電力の空売りを売上にたてた乱脈決算で、その負債総額は少なくとも 310 億ドル、簿外債務を含めると 400 億ドルを超えていたのではないかとも言われています。続いて、MCI の買収等を経て大手通信会社となったワールドコムも Sprint の買収に失敗し、粉飾決済を重ねて、2002 年 7 月に経営破綻しました。いずれもアメリカ史上最大の企業破綻と言えます。突如の破綻の原因は会社経営にある事は否めませんが、決算上でそのような危機の状況が見えないのが問題とされ、その見直しが始まりました。

このことから NYSE に上場している PLDT としても新たな監査方式に従わなくてはならなくなり、急遽、経理・監査方式の見直しとなりました。と言っても、新たな監査方式が既に決定して居る訳ではなく、現地の監査法人の指導のまま決算を行おうとすると、ワシントンの本社から、その方式では不満足だ、承認できない、見直せと言ってきました。しかしながら、正式な方法は未だ決定していないのでもう少し待てとの指示が出たり、何度も取締役会を開いて修正しなければならない等混乱を極めました。世界中の大企業が大騒ぎでした。此れを契機に多少の時間を置いて、日本でも多くの企業が国際会計基準に従って決算をするようになりました。

6.4　ゴ・コンウエイによる乗っ取り

サリムは当時インドネシアの最大華僑グループで、Smart プロジェクトとの関係はすでに紹介しました。スドノ・サリムは福建省からジャワに渡りスハルトに協力して財を成したそうで、FPC のパンギリナンはその息子である現総帥のアンソニー・サリムの言わば学友として目を掛けられ、その後グループの番頭格として香港の FPC を率いていました。構造は複雑ですが簡単に言えば、Smart/PLDT はそのフィリピン現地法人 Metro Pacific の子会社の格好となっていました。

PLDT の債務のリストラの目処がついた丁度其の頃、First Pacific の親会社のサリム財閥がインドネシア政府によって不当蓄財として罰金を課されました。罰金額は約$2B と記憶していますが、サリムとしては資産の差し押さえを受けるよりも、自主的に清算したほうにメリットがあるとして資産を自主的に売却して納める立場をとりました。その結果、サリムの持つ PLDT 株を、強引な経営で有名なゴ・コンウエイ財閥へ売却するとの約束を取り交わしたとパンギリナン氏に連絡がありました。オーナーが売却すると決断したので、これに従わざるを得ないという立場で在りながら、折角ここまで努力をして育てたプロジェクトであり、これを阻止したいが、何とか成らないかと NTT に相談する状況でした。ゴ･コンウエイ側からはデイールを進めるため、早期にデューデリジェンスを行い、傘下の通信会社 Digitel 等との統合も果したいと言って来ていました。NTT

の一部ではゴ・コンウエイの強引なやり方で合理化が早く進んで利益が増えるかもしれない、この際乗換えを図るべきと言う意見を唱える人もあり、種々議論は有りながらも結局、NTT は中立の立場をとる事としていました。ただし、実質的なオーナーの変更は、折角整った JBIC からの融資契約にとってはディールブレイクにあたる契約上の重要な変更事項であり、また日本商社を初めとする債務のリストラ計画も御破算となる可能性もありました。小生にすれば今までの全ての努力が御破算、最悪の結末、デフォルトになってしまう可能性もあって、兎に角穏便に済ませたい所でした。この状況で、JBIC に状況の説明に上がり『仮にゴ・コンウエイに移ったとしても NTT のポジションは変わらない、また Digitel との統合があれば合理化が加速する可能性もある』と説明を行って、急場を凌ぎました。銀行出身の川島氏が同行してくれて、『あの説明が最善でした』と後で言ってくれたのでホッとしました。マニラに戻ってみればマスコミに取り囲まれる大騒ぎで、日経新聞の記者も尋ねてきました。記者からの質問に対して、『PLDT の役員として、役員会で合意した行動をするだけだ』と答えた所、『弁護士でもあるまいし、面白くも無い！』といわれたので、『有難う、それが私にとって一番の褒め言葉です』と応じました。

ゴ・コンウエイ側からデューデリジェンスを行いたいとの再三の申し入れがあり、余りに性急であった事からゴ・コンウエイの側で十分な事前調査の実施と早期の経営権の獲得の目算が条件となっていた事が判明し、法務部門の努力で、PLDT の昔の取締役会の合意事項に、『競争関係にある相手からの内部調査には如何なる場合も応じてはならない』とした条項があった事が判明し、PLDT にとって競争相手と見做される Digitel 社がゴ・コンウエイ傘下にあった事から、これを拒否する正当な理由が見つかりました。ゴ・コンウエイ側もデューデリジェンスが出来ない現状では進められないと判断し、パンギリナン氏とサリム氏の関係も壊す事無く、穏便に乗っ取りを回避することが出来ました。サリム財閥は広範なビジネス展開をしていましたが、その中核とも言えるインドフード等の資産の売却を進め、インドネシア最大財閥の地位を降りました。なお、インドフードは結局 PLDT の親会社となっている FirstPacific が買収しています。デジテルはその後携帯通信サービスの Sun Cellular を開始しましたが、900M 帯を持たず、また基地局も不足して加入者が増えず、2011 年には PLDT がデジテルも含めて買収してしまいました。（次号に続く）

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/海外実践マネジメント/

海外グラフィティ

「銀河鉄道の父」を読んで

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

第１５８回直木賞は門井　慶喜氏の「銀河鉄道の父」である。久々に宮沢賢治ものを読んで感心したことが２つある。１つ目は、エッセイと小説とのギャップの埋め方である。２つ目は、主人公の選び方だ。私の本棚は、宮沢賢治の全集、エッセイ、評論で埋め尽くされている。宮沢賢治語彙辞典まで所有している。いわば正真正銘の賢治マニアである。宮沢賢治研究会にも属していたし、岩手にも取材に出かけたことがある。テレビ朝日ニュースステーションで、その頃湧き上がっていた賢治ブームに乗り、賢治ものを特集で取り上げたかった。自分としては、「石っこ賢さん」をテーマとした石灰岩のセールスマンを筋にしたくてシナリオを描いたのだが、ディレクターはどうしても「銀河鉄道の夜」ならと譲らない。宮沢賢治は石集めがよほど好きで、神田小川町の「水晶堂」あたりにも出入りしていた。本気で生業としての宝石商を夢見ていたのだ。

結局、ディレクターとの距離は埋まらず、この企画はお流れとなった。作者門井氏はよく取材している。まず、花巻の質屋という生家のなかで、父政次郎、弟清六、妹トシの人物像のとらえ方のうまさだ。この人物像の描き方で小説の良しあしが決まってくる。その人物の話し方、表情などだ。例えばエッセイと小説の溝はものすごい。エッセイ風に書けば、単に賢治は家業の質屋は合わないと言って済むが、小説ではそうはいかない。お客が来る。貧しい農民が鎌を持ってきて、これを担保とし金を借りに来る。その駆け引きを言葉づかいで表現しなければならない。したたかな農民のペースで事が運ぶ様子を作者は見事に描写している。お客の事を考えすぎると店はつぶれるのだ。賢治は非情にはなれない。一方で、帳簿はしっかりつけている。商いは営業と経理は表裏一体で、そのどちらかがかけても、うまくいかない。賢治は確かに、経理は出来るが営業ができないのだ。人気作家・林真理子が、エッセイで、はなばなしくデヴューしたが、小説が描けず、作家がつききりで指導に当たったと聞いている。小説では、息遣いや、心臓の鼓動まで表現しなければ読者に伝わらない。エッセイは静なら小説は動であり、まったく似て非なる物である。さすが、直木賞作家門井氏は、熟達した筆使いだ。

次いで、主人公の選び方だ。結局、質屋という家業は弟の清六さんが継ぐことになる。清六さんは兄賢治の作品の売込みをはじめ、賢治の亡くなった後も、表に出て活動をしたために、世に多く知られた存在だ。妹トシについては、「永訣の朝」で賢治にかわいがられた存在として、あまりにも有名だ。

父政次郎は、賢治のわがままをすべて許した。質屋に学問はいらないはずだが、賢治を盛岡中学や岩手農林までも進学させた。花巻農学校の教師を勝手にやめた後、羅須地人協会という農民運動まで許した。「好きなことを全部させたのだ」。この存在なくして宮沢賢治の作品は一つも生まれなかっただろう。前出の語彙辞典が出るほど、多面体の言葉の使い手なのだ。これは、自由気ままに様々なことを父親のおかげでかじった成果だ。宮沢賢治語彙辞典を編纂した原　子朗さんは、賢治の事を百科全書的詩人と呼んでいる。天文、気象、地学、歴史、習俗、方言、地名、哲学、宗教、農業、化学、美術、音楽、文学、宗教などなど、食い扶持を稼がずとも、勝手気ままに寛大で、無償の愛のなかで生かし続けさせた偉大なる父「銀河鉄道の父」の存在に気付かせた作者の勝利というべきだ。そういう意味で、主人公の選び方においてこの作品は大成功しているのだ。

（完）

一時（いっとき）「苦役列車」の時代

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

中卒の私小説家・西村賢太氏が「苦役列車」で芥川賞を受賞した時は、受賞インタビューの”本音“が物議を醸した。”風俗“という言葉が混じっていたからだ。受賞作のなかにはごく普通に出現してくる言語だが、それが、作者の語りになると、あまりにもどぎつかったのだろう。

主人公の働き口が、あるいは製本工場だったり、冷凍庫だったり、自分の貧乏学生時代のアルバイト先に酷似しているから、身に染みて心情が良くわかる。

苦役列車は、自分なりに共通するキーワードを整理すると次の５つとなる。１．冷凍の物流倉庫　２．製本工場　３．仲間の怪我　４．友人なし、恋人なし　５．１９歳の男子。

さすがにこれほどオーバーラップすると、自分の青春を描いてもらったのではないかと錯覚するほどだ。１浪のすえ第４志望の私立大学に入学直後。とにかく、のちに効率の良い家庭教師のアルバイトに就く前に、肉体労働で学費を稼ぐ必要があった。主に、１．ビラ配り　２．葛飾区の製本工場　３．品川の冷凍・物流倉庫などなど。

兄貴のよれよれの背広で大学に通ったが、アルバイト斡旋業者の紹介で向かった先が、まず「製本工場」というより下町の製本所。プレスで絞めても締めても「緩い」と女子工員にどやされ続けた。しかし家庭的であった。晩飯とビールがふるまわれ、「しゅんたろう」も帰りにはやや気分を持ち直すことが出来た。

「稼げるよ。あまり重労働じゃない」と甘言に乗ったのが、冷凍倉庫だ。ただ、寒いというので、レインコートを着ていった。カチカチに凍った鯨肉の四角いコンクリート状のものを、まず、零下１０度の工場内に潜り、猫（魚を運ぶからこういう名がある）と呼ばれる台車に載せて、＋２０度の外に運び出しこれをトラックの荷台に乗せるのが仕事だ。その労働のきつさと言ったらない。休み時間はあるが、疲れで誰も口がきけない。ベテランは、手を使わず、メ鍵で引っ掛けてトラックに載せる。ある時、他人のメ鍵が仲間の手の甲を貫通する。これを医者にも見せず、ヨードチンキで上から流すだけだ。なんという荒っぽさ。自分も、ある時小指をぶつけ、傷が今でも残っている。へとへとになって帰りの通勤列車にぶつかると、レインコートにこびりついた凍った鯨肉が溶け出して、異様な匂いを周囲にまき散らす。まさに赤面ものだ。一方、ベテランの学生アルバイトの中には、パックなどないその頃、稼いだ金でヨーロッパ旅行に行った猛者もいたにはいた。

浪人明けで、友人なし、恋人なしの１９歳。本当に酷似した状況だ。学園闘争華やかなり時代。「プロレタリアート独裁」を叫び学園紛争をやるなどという「ブルジョワの子弟の恵まれた運動家」とは程遠い生活だった。その後、肉体労働から家庭教師に生きる糧が代わり、地獄から天国に生活も変化した。

おそらく、同じ芥川受賞作で全く対照的なのが、石原慎太郎の「太陽の季節」で、こちらは、裕福で無軌道な青年の有様を描いた問題作だ。その石原が、同名の新潮文庫での解説で、西村の事を「魅力的な大男」と評し「・・・人生の底辺をあけっぴろげに開いて曝け出し、そこでしんぎんしながらも実はしたたかに生きている人間を自分になぞらえて描いている」としているのも皮肉だ。（完）

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/

海外便り

ノルウェー俳柳紀行(2)

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

北の街トロンハイムに夏来る

邸宅街 春(はる) 夏(なつ) 一緒に百花乱る

野に海に裸天国日向ぼっこ

北緯 63 度のトロンハイムも暑い。アラスカのアンカレッジより北に位置するので、私の到達最北地点になる。フィヨルドの海辺、草原広場には裸の老若男女が日光浴を楽しんでいる。オレも裸になりたいよ、うらやましい限りだ。トロンハイムはノルウェー第３の都市で、歴史は古く中世には首都だったことも。その面影を宿す旧市街の跳ね橋、そこからクリスチャン要塞に上り四囲を眺望すれば、トロンハイムの象徴ともいえるバロック様式の大聖堂が目と鼻の先に聳える。北欧でも 2 番目に大きい中世建築である。要塞への上り坂はかなり急だが斜面は住宅街になっていて、広い庭にプールや子供の遊具を備えた邸宅が立ち並び、車庫には世界中の名車が鎮座する。そして各庭に咲くカラフルな花々を一つ一つ吟味観賞しながら散策する。この季節ここでは北海道と同じように春夏の花が一斉に咲き出す。

トロンハイムには、ノルウェーに 5 校ある大学のうちの一つがあり、学園都市でもある。その所為か街中や公園に若者の姿を多数見かけ、なかなか活気のある街である。パリに住む知人の話では、友人が数年前パリの家を引き払ってトロンハイムに移り住んだという。ここで大学の先生をしているそうだが、その気持ちが分かるような街だ。

地方都市スーパー巡り買うビール美味し
酒求め街をうろうろ難儀かな

オスロの夜、一杯飲みたくなってビール缶を買おうと街に出る。しかしアルコール類を売る店は見当たらない。中央駅に隣接したショッピング街に酒類販売店を見つけたがシャッターは下りたまま。その並びのコンビニで、ようやくビールのクールボックスを見つける。だが販売は夜 9 時以降ですぐには間に合わない。バーやカフェでは店内で飲むことはできても値段は高い。その一つカフェテリアの商品ケースを覗くと、小瓶ではあるが‘GINGER BEER’とか‘ROOT BEER’といった冷えたビールがあるではないか。ショウガにしろ、何かの根っこにしろ、昨今流行りのクラフトビールの類に違いない。1 本約 700 円と少々高いが、とにかく飲んでみよう。それぞれ 1 本ずつ買ってホテルに持ち込み酒盛りを始める。口に入れてみると風味はあるが、どうもビール味とは違う。瓶のラベルにはアルコール度の記載が見当たらない。結局、正体は‘Energy Drink’であった。飲み干しても全然酔わないはずだ。でも元気が出る飲み物なら良としよう。

ノルウェーの酒類販売は国家の厳しい統制下にある。健全な国民をアルコールによって毒してはならじと、販売店を限定、販売時間も午前 9 時から午後 4 時まで、一部の店で夜間に販売を許されるほどの厳しさである。酒飲みにとっては決して居心地のよい国とは言えないが、建前を遵守しつつ上手く利用すれば難関もブレークスルーできるようだ。北部の学園都市トロンハイムではスーパーマーケットで酒類を売っている。朝 9 時

前にビールを買いに行くと、あと 10 分待てとのご宣託あり。他の商品の品定めをして時間を潰していたら、レジのお兄ちゃんが「もういいぞ」と呼んでくれた。9 時 1 分前、前夜味見をして惚れ込んだ地ビールの‘DAHLS’500ml 缶 2 本(500 円/本)を購入する。安くて美味いビールである。これを搭乗機の預け荷物にしのばせてベルゲンへと飛ぶ。このビール、結局、トロンハイム以外の街では販売していなかった。

ニーダロス大聖堂　トロンハイム旧市街　地ビール DAHLS　フィヨルドの妖精

ベルゲンの盛り場香ばし 魚(うお) 市場

ノルウェー第 2 の都市ベルゲン、街中をそぞろ歩く観光客が後を絶たない。歴史の街でもあり、近年はフィヨルド観光の基地として名を売る。古くは 11 世紀頃から漁業で栄え、中世には一時ノルウェーの首都にもなる。その後、海洋港湾の利を活かして交易が盛んになり商都として発展する。13～16 世紀バルト海から北海沿岸の交易によってドイツ商人が跋扈、ハンザ同盟の一拠点にもなる。ブリッゲン地区の木造長屋(世界遺産)にその栄光の跡を見る。港一帯に広がる魚市場とレストラン街もベルゲン名物、歴史の一端を担ってきたに違いない。最近はデンマークなどヨーロッパ諸国との空路便が増え、ベルゲン空港の拡充整備、それとともに市中心部との交通アクセスも便利になった。名実ともにフィヨルド観光の玄関口として活気を帯びてきた。

残雪のフィヨルド　ベルゲン空撮　ブリッゲン表通り　ブリッゲン裏通り

息上がるフロイエン山足慣らし
爺婆やケーブル尻目のど根性

深い海洋峡谷、リアス式海岸の一つに築かれたベルゲンは、周囲の小高い丘陵に向かってカラフルな家々が建つ。海抜 300m 強のフロイエン山に上れば市街の全貌を収めることができる。ケーブルカーで行けば楽々絶景を目にすることはできるが、シニア運賃の設定がない。片道 95NOK/人も然ることながら 3 日後のリーセフィヨルド・トレッキングに備え、此処は自力で山登りに励むことにした。一部つづら折りの急所もあるが、登坂道は整備され、全体が緩やかな散歩道といった感じだ。実際、山腹に住む人たちが生活で使う道でもある。別に途中までは車で往来できる道路もある。従って、ゆっくり登れば老人でも容易に行けるはずだ。夕刻にかけ未だ日が高く暑い最中、急斜面に生い茂った常緑樹の日陰に助けられ上る。松・杉・菩提樹・プラタナス等々の木陰を、自然の植生や花々を愛でながら歩む。途中いろんな人と出会う。上半身裸の年配男性がいるかと思えば、ブラジャーと短パンだけの女性は駆け足で降りてくる。若者はジョギング・

スタイルが多い。近所の住人にとっては犬の散歩コースになっているようだ。いろんな犬種に出会う。上り約２時間、下りは道を間違え遠回りして 1.5 時間のトレーニングであった。安易な登山道ではあるが、普段やってない山登りに聊か疲労感が残る。

フロイエン山

フロイエン山頂

ケーブルカー始発駅

ケーブルカー途中駅

残雪に白滝瀑布初夏騒ぐ
フィヨルドに陶酔クルーズ峡谷美

フィヨルド巡りの定番コース、ソグネフィヨルド征服に出掛ける。列車と船とバスに乗っているだけで大自然観光ができるのだから、こんな怠惰な行楽はない。残雪の山脈から雪解け水の放出ラッシュ、フロム鉄道の観瀑では全身水しぶきを浴びながら皆々カメラを構える。バスも特別停車して滝見物タイムを取ってくれる。この季節、フィヨルドを囲む断崖と山々が最も荒々しく躍動する。大小幾条もの滝が飛沫を上げ流れ落ちる様は壮観である。カモメの群れが我々のクルーズ船を追ってけたたましくウェルカム・コールする。(次号に続く)

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/海外便り/

談話会の話、あれこれ

第 41 回海外情報談話会模様

事務局

第 41 回海外情報談話会が 2019 年 9 月 27 日(金)15 時～17 時、(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web TV 会議室において開催された。講師は三上　哲郎様(CASL 代表、元 NTT シンガポール社長)、演題は「まるドメ企業のグローバル化」であった。映画「終わった人」予告編から始まり、実績の数々を魅力的に(本音で)語り、人生 100 年時代に向けての成功の秘訣、さらには現在注力している古民家再生事業や CASL 勉強会(毎月 2 回)の紹介など、あっという間に 2 時間が過ぎた談話会であった。

以下にいくつかの話題を列挙する。

・終わった人にならないためには、夢、仕事、趣味がなく、家に居場所がなくなることがないようにすることだ。
・父親の海外活動に影響され、小さい時から海外志向であった。
・何もないゼロから 1 にする事業開発に関心が強い。その際は、黒子に徹して、成果を自分のものにしないことに心掛けてきた。一方、営業は 1 を 10 にする活動であり、あまり関心が湧かない。
・人それぞれ個性があり、その DNA に合わせた育成・成長が大切である。
・自己申告書でニューヨーク駐在を希望したところ、国際部の初代欧米担当(技術系)に指名された。
・プレゼンテーションでは数多く失敗もしたが、ある時からシンポジウム等の他の講師と比較し、プレゼン力評価で最高得点を得ることができるようになった。
・プロジェクト E という外国キャリア数社との合同プロジェクトは、毎月 1 回世界各地でグローバルニーズを収集するものであった。最終的に、ワンストップショッピングとデータセンタが必要であると提言した。
・NTT アメリカでデータセンタ構築に取り組んだが、場所選定に腐心し、不動産屋と弁護士の確執(利益対立)、交渉の 3 原則(タフ、フェア、浪花節)を学ぶ一方、電話での脅迫やピストルでの監禁などもあり、よく生きて帰れたと思う。
・データセンタは当初、顧客が少なく、嘘つき呼ばわりされたが、1993 年のテロ事件で販売増加(ただし、テロリストの一味と疑われた)、さらには 9.11 でリカバリーセンター機能を含め、収益源として堅固なものとなった。
・1991 年に帰国し、長距離事業本部(鉢山)の企画・人材育成担当となり、LAN 技術者 2,300 名を 2 年間で育成したり、入社 2～3 年目のステップ研修で国際戦略を担当したりした。
・GINS はアークスターの原型になったが、導入前は社内の反発が非常に強かった。
・OSL (Open Systems Laboratory)は(外国製品に対する)無料のテストベッド・ショールームであり、社内からは国賊呼ばわりされたが、大量受注することができた。
・AAN (All Area Network)、NTT クリアリングハウス・クリアコンファレンスにも携わった。後者は VoIP であり、当時タブーであったが、後押しもあり実現することができた。
・Arcstar Global IP VPN (MPLS)構築に奔走し、トップセールスで相当の成果を得た。

・人生 100 年時代の成功の方程式は、Spiral-Up Method (SUM)でうなぎ登りに成長することである。気づき→閃き→伝えるのサイクルを繰り返して成長する。特に、閃きは(私の名前と同じく)「三上：馬上、枕上、厠上」や、ダイバーシティによる化学反応で生起しやすい。また、伝えるためには、プレゼンテーションに長ける必要がある。
・経営トップが英語ができないことが、失われた 20 年(30 年)の原因である。
・最近、古民家再生事業をしており、伊豆の古民家を再生し、合宿など実施している。また、毎月 2 回、CASL 勉強会を開催しており、ご関心がある方はご参加ください。
https://www.casl.jp/

＜事務局注＞講演資料は、講師のご厚意により、下記サイトからダウンロードすることができます。　https://ictov.jimdo.com/home/海外情報談話会/

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 88 号を発行することができました。今回は新たに「心の糧を下さった恩師『ウルトラ C』」のご寄稿があり、また海外実践マネジメント、海外グラフィティ、海外便りも継続しており、誠にありがとうございます。皆様からのさらなるご寄稿をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)